

◆C) 日本口腔衛生学会 (P045-C ~ P081-C)

P
045-C タバコ抽出液が歯肉上皮細胞の
バリア機能に及ぼす影響

○山賀俊介, 竹内洋輝, 天野敦雄

(大阪大学大学院歯学研究所口腔分子免疫制御学講座予防歯科学教室)

喫煙は歯周病の明確なリスク因子であるが、喫煙の歯肉内縁上皮への影響には不明な点が多い。本研究では、上皮組織のタイトジャンクション関連蛋白である JAM1 および CXADR へのタバコ抽出液の影響を検討した。歯肉上皮細胞にタバコ抽出液を暴露した結果、歯肉上皮細胞の JAM1 の局在が細胞膜から細胞内に移行し、バリア機能が低下した。一方、CXADR の局在および発現量へのタバコ抽出液曝露の影響は認められなかった。

P
046-C 天然ハーブ・キャットクローの
P. gingivalis LPS 誘発性
サイトカイン発現に対する抑制作用

○三木かなめ, 陳 舒, 玉木直文, 伊藤博夫

(徳島大学大学院医歯薬学研究部予防歯学分野)

近年、歯周病を含めた慢性疾患の予防・治療法として補完代替医療への関心が高まっているが、ハーブを用いた植物療法はその一つである。ペルー原産植物であるキャットクローの抽出物を用いて、培養ヒト歯肉線維芽細胞における *P. gingivalis* LPS 刺激による炎症性サイトカイン mRNA 発現誘導に対する作用を検討した。その結果、キャットクロー抽出物により、IL-6 と IL-8 の発現の抑制が観察された。

P
047-C アジスロマイシンが骨芽細胞の
石灰化物形成能に及ぼす影響○尾崎愛美^{1,2)}, 加藤健悟³⁾, 中井久美子^{1,2)}, 福澤京子³⁾,
北見 聡¹⁾, 飯田隆文¹⁾, 小口久雄¹⁾, 柏木 勝¹⁾, 外木守雄^{4,5)},
川戸貴行^{1,2)}

(1) 日本大学歯学部衛生学講座, (2) 日本大学歯学部総合歯学研究所機能形態部門, (3) 日本大学大学院歯学研究所歯学専攻, (4) 日本大学歯学部口腔外科講座, (5) 日本大学歯学部総合歯学研究所生体防御部門)

本研究では、歯科治療にも使用される抗生物質であるアジスロマイシンが、骨芽細胞の骨形成機能に及ぼす影響を *in vitro* で検討した。高濃度のアジスロマイシンで持続的に刺激された骨芽細胞では、アルカリフォスファターゼ活性とアリザリンレッドの染色性が低下し、ヒドロキシアパタイトの結晶成長を阻害するオステオポンチンの発現は増加した。アジスロマイシンは骨芽細胞による骨形成機能を抑制する可能性が示唆された。

P
048-C 骨芽細胞におけるビスフォスフォネート
誘導性 RANKL/OPG 発現と PGE₂ 産生
に及ぼす LPS と高濃度グルコースの影響○田中秀樹^{1,2)}, 長崎真希³⁾, 中井久美子^{1,2)}, 岡 仁¹⁾,
原田修成¹⁾, 唐鎌史行¹⁾, 外木守雄^{3,4)}, 前野正夫⁵⁾, 川戸貴行^{1,2)}

(1) 日本大学歯学部衛生学講座, (2) 日本大学歯学部総合歯学研究所機能形態部門, (3) 日本大学歯学部口腔外科学第 I 講座, (4) 日本大学歯学部総合歯学研究所生体防御部門, (5) 日本大学)

歯周病と糖尿病はビスフォスフォネート (BP) 系薬剤関連顎骨壊死のリスク因子である。歯周病と糖尿病を想定し LPS と高濃度グルコース存在下で、骨芽細胞を BP 刺激した結果、PGE₂ 産生と RANKL および OPG 発現が増加し RANKL/OPG 比も増加した。一方、PGE₂ のオートクラインを抑制する COX₂ 阻害剤の添加によってはこれらの発現は低下した。

P
049-C 糖尿病外来患者の口腔健康状態 /
歯科保健行動と
LDL コレステロールとの関連性○吉岡昌美¹⁾, 川島友一郎²⁾, 福井 誠³⁾, 柳沢志津子³⁾,
なかえひろみ, そがわゆか, ひ の だいでいすけ
中江弘美¹⁾, 十川悠香¹⁾, 日野出大輔³⁾

(1) 徳島文理大学保健福祉学部口腔保健学科, (2) 川島病院, (3) 徳島大学大学院医歯薬学研究部口腔保健学系)

糖尿病患者を対象に、質問紙調査の結果と臨床検査値を用いて口腔健康状態 / 歯科保健行動と LDL コレステロール (LDL-C) 値の関連性について統計的に分析した。その結果、就寝前歯磨きが定着していない群、忙しくて歯科受診できないことがある群、歯肉出血がある群は、対照群に比べ有意に LDL-C が高いことが分かった。ロジスティック回帰分析の結果、口腔症状や歯肉出血の有無が LDL-C と関連することが示された。

P
050-C 唾液中揮発性有機化合物による
口腔がん診断およびその部位別
特異性の検証○茂山博代¹⁾, 片岡正太¹⁾, 角田聡子¹⁾, 李 丞祐²⁾, 安細敏弘¹⁾

(1) 九州歯科大学地域健康開発歯学分野, (2) 北九州市立大学国際環境工学部)

揮発性有機化合物 (Volatile Organic Compound, 以下 VOC) は生体内の代謝変化を反映する成分として注目されている。近年我々は独自に開発した VOC 抽出手法を用いて、健常者と舌がん患者の唾液中 VOC 成分分析を行い、疾患の進行に伴い代謝成分が特異的に変化することを報告した。今回、舌・歯肉・頬粘膜がん由来の唾液サンプルを用いて、VOC 検出パターンに部位特異的な特徴があるかどうか検討したところ、若干の知見を得たので報告する。

◆ C) 日本口腔衛生学会 (P045-C ~ P081-C)

P 051-C 歯周治療が糖尿病患者のHbA1cに及ぼす影響：健康保険データを用いた検討

○石原 匠¹⁾, 松岡紘史¹⁾, 長澤敏行²⁾, 古市保志³⁾, 辻 昌宏⁴⁾, 千葉逸朗¹⁾, 三浦宏子¹⁾

(¹⁾ 北海道医療大学歯学部口腔構造・機能発育学系保健衛生学分野, (²⁾ 北海道医療大学歯学部総合教育学系臨床教育管理運営分野, (³⁾ 北海道医療大学歯学部口腔機能修復・再建学系歯周歯肉内治療学分野, (⁴⁾ 天使病院糖尿病・代謝センター)

歯周治療が糖尿病患者のHbA1cに及ぼす影響を検討するために、2014~2017年の全国健康保険協会北海道支部加入者20,735名を対象とし、糖尿病の服薬状況、歯周治療の状況を要因とする分散分析を行い縦断的に解析した。その結果、糖尿病治療薬服用者では、歯科未受診者のHbA1cの悪化がみられたが、歯周治療受診者では悪化がみられなかった。これらのことより、歯周治療によって糖尿病の病態が改善できる可能性が示唆された。

P 053-C 頭頸部癌で放射線治療を受ける患者における重度の咽頭粘膜炎症との関連因子

○川下由美子

(長崎大学大学院医歯薬学総合研究科口腔保健学)

重度の放射線性咽頭粘膜炎症と、関連のある因子を明らかにすることを目的に後ろ向き観察研究を行った。対象は、頭頸部癌で放射線治療を受ける患者の口腔管理を行った2011年7月から2020年2月までのうち、下咽頭痛と喉頭痛で根治目的に放射線治療を受けた99名であった。二項ロジスティック回帰分析の結果、重度の咽頭粘膜炎症の発症と関連のある因子は、neutrophil lymphocyte ratioであった。

P 055-C 唾液メタボロームの個人間の異同に影響を及ぼす因子の検討

○坂中哲人, 久保庭雅恵, 石川明日香, 眞弓昌大, 天野敦雄

(大阪大学大学院歯学研究科口腔分子免疫制御学講座予防歯科学教室)

生体試料中の代謝物群(メタボローム)を網羅的に測定し、診断や重症度評価に応用する試みが盛んである。本研究では、全身疾患の診断・病態評価法の確立に向け、糖尿病患者を含む成人61名を対象に、唾液メタボローム解析および臨床指標の評価を行い、メタボロームの異同に影響を及ぼす因子についてPERMANOVA法により検討した。解析の結果、舌苔スコア、冠動脈疾患の既往が交互作用なく個人間の異同を有意に説明することが示された。

P 052-C 頭頸部癌放射線性口腔粘膜炎症疼痛緩和に対するハイドロゲル創傷被覆・保護材(Episil[®])の有効性

○五月女さき子¹⁾, 川下由美子¹⁾, 船原まどか²⁾, 梅田正博³⁾, 齋藤俊行¹⁾

(¹⁾ 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科口腔保健学, (²⁾ 九州歯科大学歯学部口腔保健学科, (³⁾ 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科口腔腫瘍治療学)

ハイドロゲル創傷被覆・保護材による頭頸部癌放射線性口腔粘膜炎症疼痛緩和の有効性を検討した。15名に対してデキサメタゾン軟膏を対照とする無作為化非盲検クロスオーバー試験を行った。デキサメタゾン軟膏と被覆材の疼痛緩和効果は、それぞれ85.7%と71.4%であった。9名はデキサメタゾン軟膏を、5名が被覆材を研究後の継続使用を希望した。被覆材の鎮痛効果は、デキサメタゾン軟膏と同等またはそれより劣ることが示唆された。

P 054-C 口臭が気になったきっかけと口臭値の関連について

○大城暁子^{1,2)}, 井上裕子^{1,2)}, 深谷あゆ香¹⁾, Srinarupat Jarassi²⁾, Vy Nguyen²⁾, 財津 崇^{1,2)}, 相田 潤^{1,2)}

(¹⁾ 東京医科歯科大学歯学部附属病院息さわやか外来, (²⁾ 東京医科歯科大学大学院健康推進歯学分野)

東京医科歯科大学歯学部附属病院息さわやか外来は、口臭測定、診断、治療、予防を行う専門外来である。本研究では、外来患者を対象に口臭が気になったきっかけを質問し、「自分で気がついた」「人の態度が気になった」「人から指摘された」に分類し、口腔保健行動や口臭測定値との関連について分析を行った。その結果、口臭患者の医療面接や診療対応の一助になる知見を得たので報告する。

P 056-C 縁下プラーク細菌に着目した唾液検査による歯周病スクリーニング

○影山伸哉, 馬 佳楽, 竹下 徹, 柴田幸江, 古田美智子, 朝川美加李, 山下喜久

(九州大学大学院歯学研究科口腔予防医学分野)

唾液中の縁下プラーク細菌が歯周病の進行に伴い増加することは想像に難くない。本研究では、歯科医院を訪れた125人の唾液に含まれる縁下プラーク細菌比率を16S rRNA 遺伝子シーケンスによって調べた。その結果、4 mm以上の歯周ポケットを15箇所以上もつ重度歯周炎患者を、感度0.9、特異度0.7の精度で判別できた(AUC, 0.87)。今後、非侵襲的かつ簡易的な歯周病スクリーニング法として臨床応用が期待される。

◆C) 日本口腔衛生学会 (P045-C ~ P081-C)

P ATP 拭き取り検査を用いた
057-C ブラッシング飛沫汚染モデル調査

○ 佐々木良紀^{1,2)}, 野村登志夫³⁾, 佐塚仁一郎⁴⁾, 佐藤 誠⁵⁾

(¹⁾ 東京歯科大学老年歯科補綴学講座, (²) SAsAKI Dental Health Research and Technology, (³) 東京歯科大学衛生学講座, (⁴) 佐塚歯科医院, (⁵) 亀ヶ崎歯科医院)

健康な口腔衛生環境の保持は、きわめて重要でありブラッシングはその要である。しかしブラッシング飛沫の周囲への影響を無視することはできない。このような観点から、我々は過去2回の本学術大会においてATP法拭き取り検査を用いたブラッシング飛沫の周囲への影響についてモデル調査を行い報告した。今回、それらデータに新たな分析、検討を加えたところブラッシング飛沫の特性などいくつかの新しい知見を得たので報告する。

P 口腔症状と全身症状との重複に
058-C 関する研究：平成25年国民生活基礎調査データによる分析

○ 小松崎 明¹⁾, 小野幸絵¹⁾, 横井康乃²⁾, 鴨田剛司¹⁾

(¹) 日本歯科大学新潟生命歯学部衛生学講座, (²) 日本歯科大学大学院新潟生命歯学研究科口腔環境保健学)

口腔と全身との関連は様々な面から検証されているが、相互の症状の発現状況を検討した報告は少ない。そこで、国家統計データ(平成25年国民生活基礎調査の匿名データを厚生労働省の許可を得て入手)を活用し、その重複の特徴から両者の関連性を検討した。その結果、通院者群では口腔と全身の症状が重複している者の割合が非通院者群より高く、受療行動に対する症状の重複の影響が示唆された。

P 日本人の成人集団における
059-C 根面う蝕のコホート研究

○ 杉原直樹¹⁾, 小野瀬祐紀¹⁾, 鈴木誠太郎¹⁾, 上條英之²⁾

(¹) 東京歯科大学衛生学講座, (²) 東京歯科大学歯科社会保障学講座)

東京都の某大手企業本社従業員が毎年受診している一般健康診断の際に、2016年と2018年の2回、根面う蝕の口腔診査と自記式質問紙を用いた調査を実施した。このうち332名(男性232名, 女性100名, 27歳~67歳, 2018年時)の者がコホート集団となった。本研究では、根面う蝕の前向きコホート研究による有病率および罹患率を明らかにするとともに、発病に関する要因についての曝露を調査し、発病のリスクファクターを明らかにする。

P 地域在住高齢者における歯の喪失と
060-C 遊離糖類摂取量の関連

○ 佐藤美寿々¹⁾, 岩崎正則²⁾, 皆川久美子³⁾, 宮本 茜⁴⁾, 葭原明弘⁵⁾

(¹) 東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻臨床疫学・経済学分野, (²) 東京都健康長寿医療センター研究所自立促進と精神保健研究チーム, (³) 新潟大学歯学部総合病院予防歯科学分野, (⁴) 新潟大学歯学部総合病院歯科総合診療部, (⁵) 新潟大学大学院歯学部総合研究科口腔保健学分野)

地域在住高齢者の喪失歯数と遊離糖類摂取量の関連を明らかにすることを目的に、75歳高齢者354人を対象とした横断研究を実施した。遊離糖類摂取量に基づき対象者を4等分した。多変量ロジスティック回帰分析の結果、遊離糖類摂取量が最小の群(<2.39%E)と比べ、最大の群(≥6.05%E)では喪失歯数11本以上の頻度が有意に高くなった(調整オッズ比=2.11; 95%信頼区間=1.12-3.95)。遊離糖類の摂取が歯の喪失と関連していることが示された。

P 口腔健康状態と認知症医療費との
061-C 関連：日本人高齢者を対象とした縦断研究

○ 齋藤瑞季¹⁾, 嶋崎義浩¹⁾, 野々山順也¹⁾, 大杉和司²⁾

(¹) 愛知学院大学歯学部口腔衛生学講座, (²) 三重県歯科医師会)

口腔健康状態は認知症との関連が示唆されており、高齢者の医療費に影響を及ぼす可能性がある。本研究は、三重県後期高齢者歯科健診の受診者を研究対象とした。認知症医療費を従属変数とし、歯数、CPI、その他の要因を独立変数とした一般化線形モデルを構築した。歯数が少ない者および歯周状態が悪い者は、認知症の医療費比率が有意に高かった。歯の喪失を予防し、健康な歯周状態の維持することは、認知症医療費の抑制に寄与する可能性がある。

P 人間ドック受診者における
062-C アタッチメントレベルと内臓脂肪面積との横断的な関連

○ 友藤孝明

(朝日大学歯学部口腔感染医療学講座社会口腔保健学分野)

本研究は、アタッチメントレベル(AL)と内臓脂肪面積(VFA)との横断的な関連を検討することを目的とした。朝日大学病院の人間ドック受診者158名を対象に歯周検査を実施し、ALを5段階のコードに分けて記録した。また、腹部CT検査でVFAを測定した。多変量解析の結果、VFAの値はALのコードと有意に関連していた(standard $\beta = 0.114$)。人間ドック受診者において、内臓脂肪の蓄積に歯周病の重症度が関連することが示唆された。

◆ C) 日本口腔衛生学会 (P045-C ~ P081-C)

P
063-C 家庭における受動喫煙が現在歯数に与える影響について

いのうえゆうこ¹⁾, ざいつ たくし たいら けん と いしまる み ほ たかはしひでと³⁾,
あいだ じゅん たみや な こと
相田 潤¹⁾, 田宮 菜奈子²⁾

(¹⁾ 東京医科歯科大学健康推進歯学分野, (²⁾ 筑波大学医学医療系ヘルスサービスリサーチ分野, (³⁾ 国立保健医療科学院)

受動喫煙と口腔衛生の関係は十分に解明されていない。2016年国民健康栄養調査のデータを用いて、非喫煙者を対象とした家庭における受動喫煙と、歯の本数との関連を解析した。喫煙者、過去の喫煙者を除く20歳以上の18,812名を対象者とし、重回帰分析の結果、家庭での受動喫煙が全くない群と比べて、ほぼ毎日の群では β : -0.90 (95% CI: -1.27~-0.53) と現在歯数が少なくなることが明らかとなった。

P
065-C 後ろ向きコホート研究におけるメタボリックシンドロームの発症と現在歯数との関連

すまし の ふる た み ち こ たけうちけんじ やましたよしひさ¹⁾
須磨 紫乃¹⁾, 古田 美智子¹⁾, 竹内 研時²⁾, 山下 喜久¹⁾

(¹⁾ 九州大学大学院歯学研究院口腔予防医学分野, (²⁾ 名古屋大学大学院医学系研究科予防医学)

本研究は、2003年4月~2006年3月と2011年1月~2012年5月に定期健康診断を受診し、追跡期間中に歯数の変化のなかった867名(男性614名, 女性253名, 平均年齢 52.0 ± 6.6 歳)を対象に、口腔の健康がメタボリックシンドローム(Metabolic Syndrome: MetS)の発症に与える影響を縦断的に検討した。多変量解析の結果、現在歯数が20本未満の者は20本以上の者と比べて、その後のMetSの発症リスクが有意に高かった(OR=1.90, 95%CI: 1.02~3.55)。

P
067-C 8020達成者と非達成者の歯種別にみた歯髓の失活および歯の喪失の比較

えなみもか¹⁾ きたむらまさやす²⁾ さと み か かいだ けい さいとうとしゆき²⁾
江波 桃花¹⁾, 北村 雅保²⁾, 里 美香¹⁾, 介田 圭³⁾, 齋藤 俊行²⁾

(¹⁾ 長崎大学病院医療技術部歯科衛生室, (²⁾ 長崎大学大学院歯学総合研究科口腔保健学分野, (³⁾ 長崎大学大学院歯学総合研究科歯科補綴学分野保存修復学部門)

本研究では、8020達成者と非達成者の差がどの生活歯および現在歯に現れるのかを調べた。平成27年度から3年間で歯科補綴関連診療に際して撮影されたパノラマX線写真(962人, 45~84歳)を用いた。なお、臨床研究倫理委員会で審査・承認を得て行った。達成者と非達成者の生活歯の保有は、上顎23下顎4で50pt以上の差があり、現在歯は、上顎12346下顎5で50pt以上の差があった。8020達成には、上顎3が失活しないことが最も大きかった。

P
064-C 地域在住高齢者におけるオーラルフレイルと栄養状態の関連: 2年間の縦断研究

いわざきまさのり わたなべ かつたか おほらゆき しろべ まき¹⁾
岩崎 正則¹⁾, 渡邊 裕^{1,2)}, 小原由紀¹⁾, 白部麻樹¹⁾

(¹⁾ 東京都健康長寿医療センター研究所, (²⁾ 北海道大学大学院歯学研究院口腔健康科学分野高齢者歯科学教室)

ベースライン時に、Mini Nutritional Assessment-Short Form (MNA-SF) で評価された栄養状態が良好である地域在住高齢者466名(平均年齢=76.4歳)を対象に、オーラルフレイルが低栄養に関連するかを明らかにすることを目的に、2年間の縦断研究を実施した。結果として、ベースライン時にオーラルフレイルを有する高齢者はMNA-SFに基づく低栄養の発現リスクが有意に高いことが明らかとなった。

P
066-C Social inequalities and number of teeth in adult

○ Jarassri Srinarupat^{1,2)}, ざいつ たくし おおしろあきこ あいだ じゅん^{1,3)}
Jarassri Srinarupat^{1,2)}, 財津 崇¹⁾, 大城 暁子¹⁾, 相田 潤^{1,3)}

(¹⁾ Tokyo Medical and Dental University Department of Oral Health Promotion, (²⁾ Ministry of Public Health, Department of Health, Bureau of Dental Health, Thailand, (³⁾ Tohoku University, Division for Regional Community Development, Liaison Center for Innovative Dentistry.)

Few studies to investigated association between social inequalities and number of teeth among adult. Totally 4,534 participants from Thailand National Oral Health survey data (2017) who underwent oral examination and interviewing were included in this study. Finally, logistic regression analysis was applied to estimate the ORs and 95% CIs.

P
068-C 唾液中乳酸脱水素酵素(LDH)測定用簡易キットによるスコアの悪化にはセルフエフィカシーが関係する

えくにだいすけ かたおかくた ふくはらだいき うちだようこ とやまなつき²⁾
江國 大輔¹⁾, 片岡 広太¹⁾, 福原 大樹²⁾, 内田 瑠子³⁾, 外山 直樹²⁾,
小林 暉政²⁾, イスラム モハマド モニル¹⁾, 澤田 ななみ¹⁾,
もりた まさゆき
森田 学¹⁾

(¹⁾ 岡山大学学術研究院歯学薬学域予防歯科学分野, (²⁾ 岡山大学病院予防歯科, (³⁾ 岡山大学学術研究院歯学薬学域口腔形態学分野)

本前向きコホート研究では、唾液中のLDH測定用の簡易キットを用いて測定したスコアの悪化を歯周病の悪化と定義して、悪化に関連する因子を調べることを目的とした。岡山大学の学生113名を分析対象とした。ロジスティクス回帰分析の結果、2年後に歯周病が悪化するリスクはベースライン時のセルフエフィカシー(自己効力感)であった。歯周病予防にセルフエフィカシーの向上が重要であると考えられる。

◆ C) 日本口腔衛生学会 (P045-C ~ P081-C)

P 069-C 咬合状態と口腔機能低下の関連性に関する研究

○木林美由紀¹⁾, 白水雅子¹⁾, 山本孝文²⁾

(1) 大手前短期大学歯科衛生学科, (2) 山本歯科医院)

高齢者を対象に、咬合状態と口腔機能低下を評価しその関連性と、咀嚼能力向上を目指した食育支援プログラムの口腔機能低下予防に与える影響について検討した。その結果、口腔機能が良好な者は、咬合力表示面積、平均圧、咬合力と現在歯数が有意に高値を示した。食育支援プログラム参加者は、咬合状態の有意な向上および口腔機能低下の軽減が認められ、口腔機能低下予防に有効である可能性が示唆された。

P 070-C 周術期口腔機能管理実施状況に関する実態調査結果について

○星野行孝, 片岡正太, 茂山博代, 角田聡子, 安細敏弘

(九州歯科大学地域健康開発歯学分野)

平成24年の周術期口腔機能管理料の保険収載以降、地域での周術期口腔機能管理の取り組みが進められているが、北九州市内における実施の現状については把握されていない。そこで本研究では、小倉歯科医師会の協力を得て、会員の開業歯科医院を対象に自記式調査票による質問紙調査を実施した。テキストマイニングを用いた質的評価の結果から、今後の周術期等口腔機能管理の推進につながる知見が得られたので報告する。

P 071-C 鳥根県における口腔病原性細菌(歯周病細菌・う蝕細菌)の保菌状況と地域差に関する基礎的研究

○松浦良二, 吉川浩郎, 三上隆浩, 齋藤寿章, 齋藤 誠, 富永一道, 前田憲邦

(鳥根県歯科医師会)

鳥根県内歯科受診者(2,065人)の唾液を採取し、細菌ゲノムDNAを抽出した。DNA量を測定した後、PCR法により、う蝕病原菌・歯周病原菌の定量を行った。*P.g*菌では、さらに絨毛型により6種類に分類し、鳥根県内での地域差を考察した。

P 072-C 東京都内歯科診療所における患者への外国語対応の実態調査

○柳澤智仁¹⁾, 田村道子²⁾, 静岡夕香³⁾, 川口陽子⁴⁾

(1) 東京都福祉保健局多摩立川保健所, (2) 東京都福祉保健局医療政策部, (3) 東京都福祉保健局多摩小平保健所, (4) 東京医科歯科大学)

2020年に東京都医療機関案内サービス「ひまわり」を使用して、歯科診療所(10,257か所)における対応可能な言語について調査した。その結果、半数以上の歯科診療所は英語対応が可であった。また、各区市町村の国籍別外国人割合と外国語対応状況との関連をみたところ、中国、韓国、台湾で有意な相関が認められた。医療の国際展開を推進していくためには、外国人患者の言語面での受け入れ体制の整備が重要と考えられた。

P 073-C Periodontitis contributes to poor self-rated health

○Nguyen Thi Nhat Vy¹⁾, 財津 宗¹⁾, おおしろあきこ¹⁾, 古田美智子^{2,5)}, ふかいかくひろ^{3,5)}, あいだ 潤^{1,4,5)}

(1) 東京医科歯科大学健康推進歯学分野, (2) 九州大学口腔保健推進学, (3) 深井保健科学研究所歯学部, (4) 東北大学歯学イノベーションリエゾンセンター 地域展開部門, (5) 8020推進財団)

This study explains how periodontal health (PH) predicts future self-rated health (SRH) using data from the 8020 Promoting Foundation study in 2015-2019. 9,306 observations of 4,242 patients aged 20+ were included in the adjusted multilevel analysis. The result shows severe periodontitis was found significantly associated with poor SRH.

P 074-C 定期健診と歯科衛生士の職務環境との関連: 8020 推進財団「歯科医療による健康増進効果に関する調査研究」より

○井上裕子¹⁾, 嶋崎義浩^{2,8)}, おおしろあきこ¹⁾, 財津 宗¹⁾, 古田美智子^{3,8)}, あんどうゆういち^{4,8)}, みやざきひでお^{5,8)}, かんばらまさき^{6,8)}, ふかいかくひろ^{3,8)}, あいだ 潤^{1,7,8)}, 安藤雄一^{4,8)}, 宮崎秀夫^{5,8)}, 神原正樹^{6,8)}, 深井穂博^{3,8)}, 相田 潤^{1,7,8)}

(1) 東京医科歯科大学健康推進歯学分野, (2) 愛知学院大学歯学部口腔衛生学講座, (3) 九州大学大学院歯学研究科口腔予防医学分野, (4) 国立保健医療科学院, (5) 新潟大学大学院歯学総合研究科予防歯科学分野, (6) 大阪歯科大学口腔衛生学講座, (7) 東北大学大学院歯学研究科国際歯科保健学分野, (8) 8020推進財団)

定期健診と歯科衛生士の職務環境について全国的に調査されたものは少ない。そこで、3レベルロジスティック回帰分析を用いて、歯科健診行動と歯科衛生士の職務環境との関連を検討した。分析対象者は12,139人であり、結果は歯科衛生士の人数が多く、衛生士専用ユニットを備え、口腔保健指導の時間が長い歯科医院は、他の医院に比べて定期的に歯科健診を受けている患者数が多い傾向にあることが示唆された。

◆C) 日本口腔衛生学会 (P045-C ~ P081-C)

P
075-C 歯科衛生士に対する復職支援・
離職防止等推進事業の展開○岡田昌子¹⁾, 大城暁子^{1,2)}, 吉田直美^{1,3)}, 品田佳世子^{1,4)}

(¹⁾ 東京医科歯科大学歯学部附属病院歯科衛生士総合研修センター, (²⁾ 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科健康推進歯学分野, (³⁾ 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科歯理工保健学専攻口腔健康教育学分野, (⁴⁾ 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科歯理工保健学専攻口腔疾患予防学分野)

東京医科歯科大学歯学部附属病院は、平成29年度厚生労働省の補助事業「歯科衛生士に対する復職支援・離職防止等推進事業」技術修練部門の整備と運営の実施団体として、第1番目に採択された。本病院内に設置した「歯科衛生士総合研修センター」の事業は、基礎部門、シミュレーション部門、臨床部門の三部門からなる研修で構成されている。平成29年度の設置から現在に至る4年間の本事業の取り組みとその展開について報告する。

P
077-C 医療系学生に対する高濃度フッ化物
配合歯磨剤に関するアンケート調査 I
～使用状況と認知度～○宋文群¹⁾, 荒川浩久²⁾, 田浦勝彦³⁾, 戸田真司⁴⁾, 持田悠貴¹⁾, 山本龍生¹⁾

(¹⁾ 神奈川県立歯科大学社会歯科学系健康科学講座, (²⁾ 神奈川県立歯科大学, (³⁾ 長崎歯科大学衛生士専門学校, (⁴⁾ 神奈川県立歯科大学短期大学部歯科衛生学科)

高濃度フッ化物 (1,000~1,500 ppm F) 配合歯磨剤の使用状況や認知度の把握を目的に、う蝕予防やフッ化物配合歯磨剤に関する授業を修了した歯科衛生士学科の2年生と、対照として歯科衛生士以外の医療系 (柔道整復師, 理学療法士, 鍼灸師) 学科の2年生に質問紙調査を行った。高濃度フッ化物配合歯磨剤の使用率は全体で21.2%であり、両群に差はなかったが、フッ化物に関する知識や認知度に差が認められた。

P
079-C 日本における集団応用でのフッ化物
洗口施設実施率・人数実施率の推移
～厚生労働省フッ化物洗口ガイドライン以降～

○木本一成

(神奈川県立歯科大学歯学部健康科学講座口腔保健学分野)

厚生労働省「う蝕対策等歯科口腔保健の推進に係る調査」結果を用い、施設での集団応用フッ化物 (F) 洗口の施設実施率・人数実施率等の推移を検討した。2003年フッ化物洗口ガイドライン以降では、2019年に小学校でのF洗口の両実施率が就学前施設を上回ったが、都道府県間での格差を認めた。

小学校ではF洗口が永久歯う蝕予防対策として期待される。さらに、就学前からの継続実施の優れた効果を踏まえた永久歯う蝕予防対策の推進が望まれる。

P
076-C 無床歯科診療所における
歯根端切除術の臨床的検討
～単一施設調査～○八上公利^{1,2)}, 定岡直¹⁾, 山賀孝之¹⁾

(¹⁾ 松本歯科大学歯学部公衆衛生学講座, (²⁾ 翔栄会アーバンデンタルオフィス)

8020運動の成果とともに残存歯数は増加したが、一方で、歯周病や根尖病巣を発症する高齢者も多く見られる。歯根端切除術は残存歯を維持する方法として有効であるが、全身疾患や歯周病など患者の病状の多様性により期待通りの効果が得られないことが考えられる。そこで我々は、一次医療機関で歯根端切除術を受けた患者における根尖病巣と歯周組織の状態、および治療経過について臨床的統計を行った。

P
078-C オンラインによる「通いの場」の
活性化○日高玲奈¹⁾, 種村崇²⁾, 白田千代子³⁾

(¹⁾ 東京医科歯科大学大学院地域・福祉口腔機能管理学分野, (²⁾ 静岡県健康福祉部健康局健康増進課健康増進班, (³⁾ 東京医科歯科大学大学院)

オンラインを活用して東京-静岡間を結び、介護予防講座を33名に対して実施した。講座に関する質問 (分かりやすさ, 聞き取りやすさ等) で構成された無記名自記式質問票を用いて調査をしたところ、約88%が「満足した」との回答を示した。オンラインを活用した講座形式に対して、地域高齢者の参加満足度は高い傾向がみられた。「通いの場」の新しい運営方法の一つとして活用できる可能性が示唆された。

P
080-C ネパール連邦カトマンズ近郊
ゴダワリ市におけるオンライン
による歯科保健活動○白田千代子^{1,2)}, 深井穂博^{1,2)}, 中村修一²⁾

(¹⁾ ネパール歯科医療協会, (²⁾ 深井保健科学研究所)

33年間 NGO としてゴダワリ市を拠点に、母子から高齢者までの歯科保健医療活動を地元のひととともに実施している。通年歯科保健活動を継続実施できるように、現地の保健活動協力者を育成し成果をあげてきた。25年前よりその協力者の中から責任者を推選し、市長の賛同も得て、自立した地域歯科保健活動実施を目指してきた。今年度 COVID-19 のため、オンラインにより定期的に情報交換をし、自立した歯科保健活動を実施したので、報告する。

◆ C) 日本口腔衛生学会 (P045-C ~ P081-C)

P
081-C

特別支援学校で 「自立して給食を食べられるための」 取り組み

○白田千代子¹⁾, 日高玲奈²⁾

(¹⁾ 東京都特別支援学校外部講師, (²⁾ 東京医科歯科大学大学院
医歯学総合研究科地域福祉口腔機能管理学分野)

特別支援学校(知的障害)の小学校1年生から高校3年生で、普通に給食を食べることができる人(高3生で10%)は少ない。担任教師により問題提起され、摂食嚥下機能訓練をすることで、正常な状態にしていくが、親が毎日訓練することでより成果がある。親・教師それぞれに集団で研修を実施していた。今年はCOVID-19のため、感染予防をした上で、親子-担任の合同個別相談を実施した結果、有効な成果を上げたので、その内容を報告する。

*

*

*